2026.03.28
JLAU 関西ランドスケープセミナーVol.9

忽那裕樹氏×岩田友紀氏講演会
「図面の外側から読み解く、万博のランドスケープデザイン」



【開催概要】

日時：令和 8 年 3 月 28 日（土）16:30〜19:00

場所：ほとりで（現地開催のみ）

講師：忽那裕樹氏（㈱E-DESIGN）、岩田友紀氏（㈱日建設計）

参加者： 20 名

主催：（一社）ランドスケープアーキテクト連盟　関西ランドスケープセミナー部会

今年度の JLAU 関西ランドスケープセミナーは対面のみで開催しました。
今回は、2025 年大阪・関西万博のランドスケープ計画に携わられた㈱E-DESIGN の忽那裕樹氏と、㈱日建設計の岩田友紀氏をお招きし、会場計画の背景、デザインプロセス、施工現場での工夫、そして万博閉会後の未来像についてお話を伺いました。
後半には、参加者から事前に提出いただいた「万博のランドスケープのお気に入りの一枚」を題材に、グループディスカッションを行い、万博におけるランドスケープの魅力を深掘りしました。

ランドスケープコンセプト「祝祭する島々、協奏の森」

大阪・関西万博におけるランドスケープ全体のコンセプトは「祝祭する島々、協奏の森」です。海と島々の風景をモチーフとし、大きな島を「静けさの森」、小さな島々を会場内に散りばめる構成となっており、パビリオンの間に緑の島を配置することで、パビリオンに入らなくても楽しめる空間が形成されています。

＜静けさの森＞

「静けさの森」は約 2.3 ヘクタールの人工の森で、中心に向かって約 1.3m 上がる地形を持ち、約 1,500 本の樹木で構成されています。

その中には、1970 年大阪万博の記念公園から移植された樹木も含まれており、1970 年万博から 2025 年万博、そして未来へと続く“森の継承”を象徴する存在となっています。

万博のテーマ「いのち」からひも解くランドスケープの在り方

忽那氏は「命をテーマにしているのに、閉会後に森を切ることはあり得ない」と語り、森を残す提案を行ったそうです。

新しい樹木のみで森を構成するのではなく、万博記念公園（1970 年万博跡地）の木々を間伐し移植することで、環境負荷を抑えながら新たな森をつくり上げました。

また、「計画だけでなく、その後の使い方まで責任を持つべき」と述べられ、水都大阪や御堂筋の社会実験など、都市の緑化・公共空間の未来像にも触れながら、「森をこれからの世代につなぎたい」と語られました。

「しくみ」「うごき」「かたち」

忽那氏は、表層の「かたち」だけでなく、「しくみ」や「うごき」を考える必要性を強調されました。

行政だけが運営するのではなく、市民が自分事として関われるような中間支援組織の重要性にも触れ、計画から運用までを一連の流れとして捉える必要があるとご説明いただきました。

日本ならではの「見立て」の手法を用いたランドスケープデザイン

＜島に見立てた植栽帯＞

植栽帯の形状は、沿岸海域の地形図から着想を得たそうです。

地形図を読み解く中で、島の凹部は海流によって削られにくく円弧状の平面形状となり、島の凸部は海流に削られて角が連続する平面形状になるという特徴に気付き、これらの性質をデザインルールとして位置付けることで、島らしい表情をもつ植栽帯が形成されています。

＜海に見立てた舗装＞

水面のきらめきや波の揺らぎを表現するため、舗装材の貼りパターンをグラデーション状に構成し、島状の植栽帯際となる浅瀬を白系、深い部分をグレー系の舗装ブロックで表現されています。

コンピューターシミュレーションを用いた計画

＜静けさの森の樹木管理＞

今回の万博の樹木は、全国の圃場と府内の緑地から樹木を取り寄せ、情報を管理する必要があったため、「Urban Forest Database」を用いて、配置情報、条件変更、規格、出荷時期などを一元管理したとのことです。

＜静けさの森の樹木配置＞

「Urban Forest Database（Tree Generator）」による配置ルールは以下の 3 点です。

①自然な森を再現するための条件
・高木 3 本で 1 セットの不等辺三角形のユニットを作る
・ユニットを繰り返し並べる
・粗密、異齢、混交
②施工する際に必須となる条件
・高木支柱底盤が緑地からはみ出さないようにする
・地下式支柱が配管とぶつからないようにする
・樹木の樹幹の重なり具合をコントロールする（球体モデルにて検討）
③来訪者が心地よく感じるための条件
・よく見える場所に形の良い樹木を配置
・より影がたくさん出る場所に高木を配置

＜野草を用いた林床デザイン＞

高木配置による照度環境を分析し、明るいエリアと暗いエリアを設定し、園路側は低木地被、内側を種子吹付による野草風の林床とすることで、自然な植生の雰囲気を再現しています。

施工者との協働関係を築く

岩田氏は施工者との関係性を特に重視されており、互いに「良いものをつくる」ための協働姿勢が重要であると述べられました。
一人ひとりの顔を見て似顔絵を描きながらコミュニケーションを図ることで現場との信頼関係を築くことができ、その積み重ねが万博のランドスケープを完成へと導いたというエピソードが印象的でした。

森とこれからの私たち

本セミナーでは、万博のランドスケープが形づくられるまでのプロセスと、未来の森のあり方について忽那氏と岩田氏よりご講義いただきました。
1970 年万博から 2025 年万博、そして未来へと森がどのように継承されていくのか。
私たち自身がその未来を考える必要があることを改めて実感させられる内容でした。

◇グループディスカッション

今回のセミナーは相互レクチャー型の形式で行い、参加者には「静けさの森や万博会場内のランドスケープに関するお気に入りの一枚」を持参いただきました。
お気に入りの理由や講師への質問など、前半では出てこなかった視点が多く共有され、活発な意見交換が行われました。




グループディスカッションの様子

（文責：水谷）